

「運動の楽しさを味わいながら、仲間とかかわり合い、高め合う子どもを育てる体育学習」

1 研究仮説

運動の特性をふまえ、身につけさせたい技能を明確にし、仲間と言語活動を通じたかかわりを持たせながら学習に取り組ませることで、運動の楽しさを味わいながら技能を習得できるのではないかと。以下の視点を基に「勢いのある体育学習」の充実・発展を図ってきた。

◎研究の視点

ア)運動の楽しさを感じるために（主体的な学び）

「わかる」と「できる」を大切に、つないでいく指導の工夫と充実。

イ)かかわり合いのある学び（対話的な学び）

多様なかかわり方と場の設定の工夫、ICTの効果的な活用。

ウ)高め合いのある学び（深い学び）

さまざまな言語でかかわり合い、「わかり方」を保証する。

2 主な活動

- (1) 郡小体研総会（5月1日）
 - ・平成29年度事業・会計報告
 - ・平成30年度研究推進計画の決定および役員選出
 - ・「鳥取県小学校体育研究大会」へ向けた取り組みスケジュール・運営計画の検討
- (2) 研究推進委員会（6月26日以降随時開催）
 - ・「鳥取県小学校体育研究大会 日野郡大会」へ向けた取り組みの協議
- (3) 夏季一泊研修会参加（8月6日・7日）
- (4) 第38回鳥取県小学校体育研究大会【日野郡大会】（10月19日）

会場：根雨小学校・日野中学校体育館
- (5) 中・四国小学校体育研究大会【岡山大会】参加（10月27日）
- (6) 日野郡小体研体育部会授業研究会

「友だちとつながって 自分の心や体の変化に気付こう」6年生（体ほぐし運動）

5月29日 日南小学校 永岡康隆 教諭

「ボールは友だち ～ワールドカップ KOUFU 2018」6年生（ボール運動）

7月6日 江府小学校 稲田修士 教諭

※台風のため信州大学教育学部 岩田 靖教授の講演・助言に変更

「心をついに！ 体も心もほっかほか！」4年生（体ほぐし運動）

11月29日 江府小学校 恵比奈宏志 教諭
- (7) 全体研修・反省会（2月）
 - ・今年度の研究のまとめと活動の反省、今後の研究推進について

3 まとめ

10月19日（金）に第38回鳥取県小学校体育研究大会（日野郡大会）を根雨小学校をメイン会場として実施した。大会主題を「運動の楽しさを味わいながら、仲間とかかわり合い、高め合う子どもを育てる体育学習」として、県内各郡市から149名の先生方にご参加いただき、盛大に開催することができた。日野郡内の4つの小学校が取り組んできた「勢いのある日野郡の体育」を3つの公開授業と1つの実践発表、研究概要にまとめて報告した。そして、信州大学教育学部の岩田靖先生から「体育の主体的・対話的で深い学びと教師の指導性」についてご講演いただき大会を締めくくった。

今後、平成31年度の中四国小学校研究大会（徳島大会）の領域別提案（体ほぐし運動）に向けて今回の研究大会の成果をもとに、郡内の4小学校でさらに授業研を中心とした実践を重ね、研究を深めていきたい。

【実践事例1】

第1・2学年「くろにんじゃの大ぼうけん（マットを使った運動遊び）」の実践を通して 日野町立黒坂小学校 其山 佳裕

1 研究の実際

(1)「マットを使った運動遊び」の特性

マットを使った運動遊びはマットを使っていろいろな方向へ回ったり、転がったり、手で体を支えたり、バランスをとったりするなど、日常の動きとは異なったいろいろな動きを体験できる楽しい運動である。動物歩き、手押し車、ゆりかご、前ころがり、カエルの足うち、壁登り逆立ちなどを通して、「腕支持感覚」「バランス感覚」「回転感覚」「逆さ感覚」等を養うことができる。また、今できる動きをより正確にできるようにしたり、組み合わせて調子よくできるようにしたり、動きの出来栄えについても楽しさや喜びを味わえる運動である。さらに、様々な動きの中で、友達に補助してもらったり励ましてもらったりするなど、友達とのかかわりを深めることのできる運動でもある。

(2) 児童の実態

児童数12名の1・2年生の児童は、積極的にボール遊びやおにごっこ、遊具を使った遊びなどを行い、体を動かすことが好きな児童が多い。

本単元に入る前の事前アンケートでは、全児童が「マットを使った運動遊びが好き」と答えた。その理由としては「いろいろな技ができるようになることがうれしいから」「やったことがない動きができるから」「マット運動が得意だから」というものがあつた。2年生の児童のほとんどが基本的な技（ゆりかご、まるたころがり、かえるの足うち、首倒立など）はできているが、1年生は丸太転がりでまっすぐ進めない、首倒立で足を上げた状態のまま静止できない児童が多い。また、前転がりや後ろ転がりでは、転がるための体の動かし方が分からない児童が多い。腕支持を苦手とする児童がほとんどである。

(3) 学びへの働きかけ

《学習内容の明確化》《学習過程の工夫》

- 学習のはじめに、「わたしたちの体育」にあるイラストを提示したり、それぞれの「技」のポイントを教師が模範演技で示したりして、ポイントを意識して練習を行うようにさせる。
- 個人でコースに挑戦するようにし、課題を明確にしてからグループ練習を行うことで、効率的に「技」の練習を行えるようにする。

《効果的な指導》

- 白忍者、黄忍者、青忍者、レジェンド忍者の4つの難易度のある課題を設定し、児童の実態に応じて難易度を変え、児童が楽しみながらいろいろな動きである「技」に挑戦できるようにする。
- 児童同士が見つけた「技」のポイントを様々な言語（動作言語・比喻言語・擬音言語など）を使ってコミュニケーションボードにまとめ、「わかる」の多様性を保証する。
- 「技」の苦手な児童のために練習スペースを作り、技能の向上を促す。

《単元構成の工夫》

- いろいろな動きを、忍者の「術」として児童に取り組みさせることで、外発的動機付けを行い、児童の学習に向かう意欲を高めるようにする。
- 単元の最後に、身につけた「術」を全校の前で披露する場を設定し、「技」を活用させることで、内発的動機付けを行う。

《学び合いの充実》

- タブレットでの動画撮影をそれぞれのチームで活用することにより、自分で動きを確認したり友達にアドバイスしたりできるようにする。
- 技のポイント等、既習事項を側面の壁に掲示しておき、児童が振り返りをしやすくする。



○グループ学習では、マットを使った運動遊びが得意な児童と苦手な児童が同じグループになるように編成し、よい動きのできる児童を柱に、活発な話合いができるようにする。

(4) 成果と課題

- ・「くろにんじゃの大ぼうけん」という单元名に設定し、忍者がいろいろなコースに挑戦していくように指導計画を作成したことによって、児童が意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・技の難易度を4つずつ設定することで、各児童が自分の課題を把握した上でグループ学習を行い、課題意識を持って学習に取り組むことができた。
- ・「わたしたちの体育」のイラストや技のポイントを側面の壁に掲示しておくことで、「技」のイメージ化が図れたり、児童同士の教え合いを促したりすることができた。
- ・タブレットの動画遅延ソフトを使うことで児童が自身の課題を客観的に把握することができた。
- ・振り返りボードを使って全員で振り返りを行うことで、一人一人の時間ごとの成長を全員で共有することができた。
- ・レジェンド忍者の技の目標設定が高すぎて全員が達成できなかった。児童の実態を見定めて目標設定を行うべきであった。
- ・場の設定が大掛かりになり時間がかかり、単位時間の中で学習活動を全て行うのは難しかった。



【実践事例2】

第6学年「ボールをつないでバウンズアタック ～江府っ子選手権 2018～（ボール運動）」 の実践を通して 江府町立江府小学校 稲田 修士

1 研究の実際

(1) ソフトバレーボールの特性

ソフトバレーボールは、チームの仲間と協力して攻撃することで得点につなげるスポーツであり、チームで考えた作戦を生かして攻撃を組み立てたり、仲間のつないだボールを相手コートにアタックして打ち込んだりすることが楽しいスポーツである。ソフトバレーボールの「楽しさを味わう攻撃」を組み立てるには、ボールをはじくレシーブやパスができることや、サーブやアタックなどのボールを打つ技能が必要となる。また、ボールが来る位置に体を素早く移動させたり、ボールの落下地点を的確に見極めて移動したりする動きも必要となる。自分たちの実態に合ったルールを工夫したり、教具を工夫したりすることで、緊張感のあるラリーがより多く続く楽しさを味わうことができる。運動の苦手な児童も容易に参加でき、意欲的な活動を期待することができる。

(2) 学級の実態

本学級は、男子7名、女子11名の合計18名の児童が在籍し、男女ともに意欲的に学習に取り組むことのできる集団である。

事前の調査では、児童の大半が、「体育学習は楽しい」と答えている。しかし、「運動は好きですか」という質問には、7名の児童が「いいえ」と回答している。実際に、課外の運動クラブに所属して、日常的に運動に親しんでいる児童は、学級の児童の半数にも満たない。新体力テストの結果を見ると、本学級の平均値が、県の平均値を下回るテスト項目が多い。一方で、「ソフトバレーボールは好きですか」という質問には、16名の児童が「はい」と答えている。第4学年において、ソフトバレーボールの学習をしており、運動が苦手な児童にとっても活躍場面のある学習経験ができている。こうしたことから、意欲的に学習に参加できる児童が多いと考えられる。

(3) 学びへの働きかけ

《学習内容の明確化》《学習過程の工夫》

○学習のはじめに、「レシーブ→トス→アタック」の流れがある攻撃やアタックがありながらも、何

度もラリーが続くゲームができることを学習の最終的な姿として掲示し、そこに向かうために段階的な作戦を立てたり、ルールを工夫したりするようにさせる。

《効果的な指導》

- ソフトバレーボール 78cm を用いることで、ボール操作に不慣れな児童や運動が苦手な児童でも、恐怖心がなく容易に操作できるようにする。
- 学習のはじめは、自コートでの触球回数を多めにとり、児童の実態に合わせて触球回数を3回に近づけていくようにするなど、児童の実態に合わせてルールの工夫をしていくようにする。
- 学習に対して楽しく取り組んだり、明るく挑戦したりする雰囲気づくりをするために、チームで声かけやアタックが決まった後の自然なハイタッチを価値づけて取り組んでいくようにする。
- アタックやレシーブなどのボールの軌跡を記録する活動を取り入れ、得点になりやすい攻め方などを話し合い、自分たちのチームに必要な練習などを考えて取り組む場を設定する。

《単元構成の工夫》

- 活動②では必ずワンバウンドバレーを取り入れることでチームごとの成果や課題が把握しやすくする。課題に対して、チームに合った練習を考え解決していく活動の場を設定する。
- セルフジャッジを取り入れることで互いの思いを受け止めながら、折り合いをつけて学習を進める力を高める。

《学び合いの充実》

- 作戦タイムでは作戦ボードを活用してゲーム中の動きを視覚化することで、自分の考えや、友だちのよい動きなどを具体的に取り上げて仲間に伝えるなど、児童の言語活動をより活発なものにする。



（４）成果と課題

- ・ソフトバレーボール 78 c mを使用することで、ボール操作に不慣れな児童でも恐怖心がなく、積極的にレシーブやアタックに挑戦することができた。また、空気圧を調整することにより、ワンバウンドでのトスがアタックをするのに概ね丁度よい高さに上がってくるようにできた。
- ・アタックやレシーブなどの軌道を記録する活動を取り入れたことでチームごとのアタックの傾向や得点につながるアタックのコースの傾向が明確になり、自然発生的に児童が話し合う活動が生まれたとともに、その課題に対する練習方法などを工夫することができた。

一方で、アタックが得点につながる場合には、コースばかりではなくアタックの強さや、守備者の位置も大きく関係する。これらの関係性を児童が明確に分析することは難しいと考える。こうした点を踏まえ、得点につながるボールの軌道に視点を当てることのできるような記録方法の工夫が今後の課題であると考えた。

- ・触球前に「必ずワンバウンドさせる」という明確な制限を与えたことによって、触球に係るルールに統一性を持たせることができ児童が自信を持ってレシーブやトスを行うことができた。「ノーバウンドまたはワンバウンド」「自コートで1回だけバウンドさせてもよい」などの2通りの対応が許されるルールを与えた場合、触球時の思考の迷いが生じることによるレシーブミスなどが起こってしまう。本単元でつけたい技能、思考・判断の目標を明確にし、その目標に迫るために必要なルールの設定が大切であると感じた。



- ・作戦ボードの活用により児童同士が自分たちの動きを可視化して話し合う活動ができた一方で、ICT を効果的に活用できればより自身の動きを克明に可視化できたと考える。ただし、準備や片づけに時間を要するソフトバレーボールのような活動では、運動量の確保とのバランスを考慮して ICT を積極的に導入できるようにしていきたいと考える。